

ヨミトリとヨミトリ君で 一緒にしましょ！(16)

高木久美子

意識があるのに、わかっているのに、言葉を発しているのにそれが伝わらないことについて、どう向き合い、取り組んでいくかということは、人の尊厳に関わる大切なことです。心と技能と技術を繋ぎ、障害のある方のコミュニケーション支援・レクリエーションの楽しい機会の提供を目指して非営利で活動しています。活動を通して学んだこと、感じたことなどを書いていきます。

「広がる夢と希望」

2013 年に介助付きコミュニケーション「指筆談(ゆびひつだん)」による意思疎通支援の取り組みを始めて
今月(2026 年 9 月)で丸13年となりました。

前号の投稿から 3 か月。この 3 か月の間に、13 年間の活動の中でも特別にうれしい出来事がありました。
うれしいことはまだまだ続きます。そして驚きの展開も！

■驚き編「高木さんほどじゃなくていいから」

心肺停止からの蘇生後低酸素脳症の後遺症による遷延性意識障害の診断を受けているAさんを意思疎通支援で訪問しました。いつも奥様がそばに寄り添って親身にお世話されています。お訪ねした時、お一人ヘルパーの方が入っておられました。

奥様が言うてくれました。

「高木さん、本当にありがとうございます。夫はきっと意識があるのだろう。なんとなくわかっているのではない。わかっていると信じたい、そういう気持ちで、ずっと介護してきました。でも脳の画像とか見せられて、医学的には覚醒は難しいと言われるでしょう。やっぱりそうなのかなと、いろいろやっても無駄なのかなと、つい思ってしまうこともあったんですよね。でもたとえずっとこのままでも、生きていてほしい。私と一緒にいてほしいと思って、日々暮らしてきたんです。

そうしたら、意識があるなんてものじゃなくて、高木さんに手伝っていただいて、こんなに書けて、普通に話ができるじゃないですか。ものの言い方とか、口癖とか、本当に倒れる前の夫のまま、そのままの話し方なんです。最初にそれを見た日は、びっくりと嬉しさで夜まったく眠れなかったです。

私は言いました。

「よかったです。とにかく、『あなたがわかっていること 伝えたい』という、その思いだけでやっていますので。ご家族によっては、長く寝たきりで意識の有無もわからなかった当事者の方が言葉を書かれることを、あり得ない、どうしても信じられないと、認めてくださらない方もおられますので。ずっと長い間、毎日手を握っ

ても握り返してくれないその手でそんなすらすら字が書けるはずがないと。お気持ちはわからないではないのですが、当事者の方は、やっぱりようやく思いを伝えることができ喜んでおられるので、なかなかそこが認められないと、私がどうかより、当事者の方がお気の毒だと。

奥様が、Aさんがわかっておられることをそのように喜んでくださって、私も本当にうれしいです。あ、いけない。まずAさんのお言葉を聞かなくちゃ、ですね。Aさん、こんにちは。体調はいかがですか」

「ありがとうございます。私が意識があるとわかってから、こいつがすごく喜んで毎日はりきっているのがよくわかるので、それが一番うれしいです。」

控えて立っていたヘルパーさんも笑顔です。若い世代の優しくそうな良い感じの方です。Aさんが続けました。

「高木さん、ヘルパーのBさんです。Bさん、いつもありがとうございます。あなたは本当に良い人で、いつもとても丁寧に優しく接してくださって、私はとても感謝しています。いつかお礼を言いたいとずっと思っていたけれど、この状態ではなかなかそういうわけにはいかなくて。

でも今日は高木さんがいるので、こうして直接お礼が言えて、本当にうれしいです。

Bさん、私がこんなふうで、動けなくて話せなくて、わかっているかどうかともわからない状態でも、いつも明るく話しかけてくれて、ありがとうございます。皆さんちゃんと介護してくださるけど、なかなかそういうふうに自然に話しかけてくれる人はいないから。本当にありがとう。」

Bさんが答えました。

「Aさん、すごいです。びっくりです。いやあ、いいなあ。そんなふうに言っていていただいて。涙が出そうです。でも当たり前に行っているだけですから。」

それから高木に向かって言うてくださいました。

「それにしてもすごいですね。初めて見ました。こんなやり方あるんだ。Aさんの言葉がどうやってわかるんですか。」

「手は動いていないように見えますが、Aさんが字を書こうとするわずかな動き、微小動作、マイクロムーブといいますが、随意的動きが確かにあるので、Aさんの手を下から支えて重力からなるべく開放して、その指先の動き、荷重の増減や移動の方向を私のもう片方の手のひらで感じて、接触圧のセンシング。文字の、ひらがなでお願いしていますが、一画一画を認識して文字として読み取ります。介助付きコミュニケーションの一つで、指筆談というのですが、この動作原理を利用した意思疎通デバイスももうできているし、実用新案も取っているんですよ。論文も書いています。」

こういう時のたびに、対人援助学会で論文を採択していただけたことに心から感謝し、ドヤ顔になることがセットとなっております。それにしても高木、もう少しわかりやすく説明できないものか。

Bさんが言いました。

「なんか専門用語がいっぱい…難しそうですが…。でもすごい。確かにAさんが書かれていると思います。Aさん、よかったですね。言葉を読み取ってもらえて」

奥様もうれしそうです。

私は再びAさんの手を取って話しかけました。

「Aさん、良いヘルパーさんが担当してくださっていて、よかったですね。」

「そうなんです。この人は本当に性格が良くて、人気があるんです。裏表がないから、みんなBさんのことが大好きなんです」

えー、みんなって、そんな、ここにいる時以外のBさんのこともわかるんだ。まぶたは上がりにくいし、見えにくいはずなのに、まるで見てきたような感じで言われて、すごいな…。まあ、でも当事者の皆さん、けっこう感覚鋭くて、いろいろわかっている感じがするしな一。

と、私はAさんの手を取ったまま、感心していました。するとAさんがまた指先を動かす微かな兆しがありました。ヨミトリ開始。

「高木さん、今日はちょうどいいところに来てくれました。実はこいつに言いたいことがあって」

奥様のことを「こいつ」とおっしゃるところに、愛を感じる高木です。奥様が一步近づいて言いました。

「何よ」

「おまえ、うるせえんだよ。声がでけえんだよ。声がお・お・き・い・の。頼むからもう少し小さな声でしゃべってくれ」

「あら、そんなに大きいかしら。」

確かに、奥様、艶と張りのあるお声がよく通ります。良い意味で。

高木、その場をとりなそうと、Aさんに言いました。

「Aさん、すみませんでした。私も、今日来る道々、そういえばお耳の聞こえ具合を伺っていなかったなと。今日はちゃんとお聞きしなくちゃって思いながら来たんです。今更ですが、私の声は、大きさはどうですか」

「まあいいです。でももっと小さくてもいいです。」

「え、普通に話しているつもりでしたが…。このぐらい？」

「もっと小さく」

「このぐらい？」

「それでも十分聞こえます」

「えーっ！ そんな小さな声で聞こえるの？ あなた！」

「うるせえ。でかいて言ってるんだろ」

Bさんが、もう可笑しくて耐えられないという感じで笑いをこらえています。

「Bさん、Bさんものです。」

「え」

「Bさんも声が大き過ぎ。Bさんはすごく良い人なんだけど、他に何も言うことないんだけど、頼むから声だけ小さくしてください。」

笑っていたBさん、神妙な顔つきになりました。Aさんが続けました。

「おまえとBさん、声がでか過ぎなの。あ一言えてよかった。まったく、二人とも、たくさん話しかけてくれるのはいいんだけど、とにかく声が大きくて、たまらんと思っていたんだ。おい、おまえ、わかったか」

奥様とBさん、二人並んで、学校で先生に怒られた生徒のようにちょっとしゅんとして、立っています。ご家族の何年ぶりの親子げんかの真剣勝負なども含めて、人が怒ったり怒られたりする場面に立ち会ってしまうのは、しかも当事者がガンガン言うのを読み上げるのは私、という、なんとも、どうしていいか困ってしまう時もあるのですが、でも 2 人一緒に怒られるのは、見ていて気が楽というか、何につけてもお連れがいるというのは心強いもので…怒られたお二人もいつの間にか一緒に笑っているし。

とにかくAさんは、とりあえず懸案事項の一つを（他にはあまり無いことを願いつつ）解決できたので、先ずはめでたしめでたと。

私は、一応確認をと思って、Aさんに尋ねました。

「他にはどうですか。何か困っておられる事、伝えたい事とか、ありませんか。」

「おまえ、すごくよくやってくれてありがたいんだけど」

奥様に対してでした。

「何？」

「いつもきちんとしていてさすがだと思うんだが、きちんとし過ぎというか…。」

「何が？」

「俺のいろいろ備品とかあるだろ。タオルとかおむつとか。みんな出したり入れたりするし、整理してもぐちゃぐちゃしてくるんだからそんなにいちいち気を遣わなくていいんだって。」

「遣ってないわよ。」

「もっと手を抜いていいんだよ。おまえの、自分の身の回りだって、いつもすごくきれいに片づけてて」

「いいじゃない。そういう性分なんだから」

「それにしても、洋服も、別にみんな仕事で出入りしてるんだから、家にいるんだからそんなにきちんとした身なりでなくていいんだよ。もっとラフなのでもいいじゃないか」

うう。なんて優しいご主人。私なんていつも「少しは片付けろ」「もう少し格好考えろ」って言われてばかりなのになって、高木、そこは反省すべし。そういえば、奥様いつも本当にきちんとしているもんなー。

Aさん、なおも続けます。

「一人でいる時とか、もっとだらだらしていいんだよ」

そうかー、人の目がない時も、ちゃんとしていらっしゃるんだ。すごい。ん？ 待って。一人でいる時？ 一人でいる時って、もしかして A さんも見ていない時？ え？ でも見えているの？！

「高木さんほどだらだらしてなくてもいいけど、もう少しリラックスしてほしいんだよ」

なんですと？！

「ちょっと、Aさん、すみません、確かに私、家で、ものすごくだらだらしていますけど」

「高木さんほどだらしなくしていいとは言わないけど」

ぎえー、やめて。Aさん、どうしてわかるんですか。

「あ、あの、Aさん、確かに私はものすごくだらしなくて、ズバリ賞なんですけど、」

奥様は、といえば、目が点になっておられます。固まってる…。でも、なおも

「高木さんほどだらしなくて困るけど」

と続ける A さんに、奥様は、次第に私に対する憐憫の情と慈愛が湧いてこられたのか、何かが堰を切ったように、ぷっと吹き出し、笑いが止まらなくなっていました。

それを見て、私もなんだか可笑しくなってしまう、

「もう A さん、はるばるバスを乗り継いでやってきて、こんなに一所懸命貢献しているのに、勘弁してくださいよ」

と笑いながら突っ込みを入れてしまいました。そして続けて言いました。

「ひょっとして、見えてますか？」

「…。」

A さん、手を動かされませんでした。

私の問いには答えず、A さんは続けられました。

「少し手を抜いて、気楽にやってくれ。俺は生きていたい。長くお前に面倒を見てもらいたいから。元気でいてほしいから。よろしく頼む。」

静かな時が数秒流れました。

それからまた、A さんが別の話題で書き始めました。他の当事者の人たちはどうしていますかとか、どこか外出したいなとか、さっきのべらんめえ口調(文字)で、世相一刀両断とか。

ひとしきりみんなで歓談して、笑って、そしてまた来月の訪問をお約束して、おいとまして来ました。

意識は清明なのに、全身のマヒ、発語不能のためにすべての能動的な体の動きを制限され閉じ込められた極限の状態に長くおられる日常の中で、当事者の方々が唯一随意で制御できる「感覚」という機能が研ぎ澄まされて非常に鋭敏になられていることは、当事者の方々との対話を通して以前から感じていたことでした。

そして、そういう鋭さ、繊細さとは別の、いわゆる感覚代行とか感覚拡張といった、そういう領域に収まりきらない、何か特別な知覚を持っておられるのではないかと感じることも、実のところ、あるのです。

門のところまで黙って私を送ってくださった奥様が、別れ際に口を開かれました。

「高木さん、さっき A が言ったことね。」

「私がだらしない生活態度だということですね(苦笑)」

奥様も笑いながら

「本当にごめんなさいね。でも、私ね、最初はこの人いったい何を言ってるんだろうと思ったんだけど。

主人が失った体の機能はすごく大きいけど、人間ってその分、健常者が発揮できない能力が備わって、私たちが想像できないぐらいのすごいレベルでいろいろわかってたりしているんじゃないかって。

そして、高木さんを引き合いに出してしまって申し訳なかったですけど、あんな風に私を見て心配していてくれて、自分ができることで役に立とうとして。

なにか人間の不思議っていうか、すごいものを見たなっていう感じがしてきたんです。

それを普段は誰にも伝えられない状況にあるわけで、やっぱり、意思疎通はどうしても必要なことだって。

「ありがとうございます。私も、これまで、『あなたがわかっていること 伝えたい』をモットーに活動が続けて来たと、今日も申し上げましたけれど、これからは、『あなたがとんでもなくわかっていること 伝えたい』に変えなくてははいけなくなってます。すごく良いきっかけになりました。」

うれしくて笑いながら言った私に、奥様もにっこり笑ってくださいました。そしてまた言われました。

「これまで、私はAの体の機能が少しでも回復するようになって、リハビリや鍼灸の本を読んだり、自分でマッサージを工夫したりいろいろやってきたんですけど、意思疎通に関しては、まばたきできない、手も握り返してこない、どうにもできないって、あきらめたというより、ただ、どうしていいかわからなくて、途方にくれているという感じだったんです。

でも高木さんが指筆談をやられているのを見ていて、これはすごい技術だと。思いを伝えたい、知りたい当事者の人、ご家族がたくさんいるはずだから、意思疎通の可能性のあることを、たくさんの人に知ってほしいと思うんです。

私もAと言葉で意思疎通できるように勉強します。よろしくお願いします。」

Aさん宅を後にした私は、奥様の熱い思いが心に沁みて、こみ上げるものを抑えることができませんでした。

■指筆談への思い

介助付きコミュニケーションの指筆談における介助者の務めは、当事者の方が書かれた通りに一字ずつ読み上げる、ただそれだけです。

ただ読み上げるだけでなく、当事者の方の美しい言葉も、怒りや悔いの、こちらがたじろぐほどの激しい言葉も、その方が書きたい速度で、書きたい優しさ、力強さで、書きたいように、言いたいように、自在に書けるように。私は一体となって走るような伴走ができるように、ただそれだけを思って、技能の向上を目指して来ました。

そうして技能を突き詰めて実践を重ねていく中で、自分の指筆談の取り方に、ある変化が生じていることに気がつきました。

それは、書字の連続により、字(ひらがな)が連なって一つのかたまりになった結果として名詞や動詞や形容詞が判明するのではなく、一見単なるストローク(画)の組み合わせに見える動作の微かな接触圧の増減や方向そのものが書き手の気持ちを乗せて伝わってくる、そんな体感でした。

そして、ひらがなの画像が私の脳に映ると同時に、むしろそれより一瞬早く、当事者の方が無意識に発話想起する声のような振動も、併せて私の体感が捉えるような感覚。

そんなふうに取り取るようになった頃から、当事者の方々から「すごく自然に書ける」「言いたいように書ける」と言われるようになりました。

微小動作を接触圧のセンシングにより認識する。

この指筆談のメカニズム、動作原理は確立しています。

ここをしっかりと習得することで、当事者の方が書く文字の読み取りの正確性が確保されます。

でも、文字の「形」を認識するだけでは意思(気持ち)の疎通は難しい。

介助者の好むスピードや美意識をベースに取り取ろうとしている間は、当事者の方の本当の気持ちはキャッチできません。

能力の不足によって当事者主体にできない場合は、そのことを真摯に詫びて、当事者の方の許しを得て習得に協力していただく。私も13年間ずっとそのようにやってきました。

私はピアノが大好きです。小さい頃から習っていて、一時は音楽学校への進学を考えたこともありました。結局、もう一つ大好きだった外国語を専攻する道を選び、ピアノは趣味として続けることになりました。

何人か先生が変わりましたが、一番慕っていたピアノの先生は、残念ながら幼い子どもながらも、演奏はあまり上手くない人だと感じていました。生意気な生徒ですよ。でも、レッスンでは、弾くということの基礎を子どもにもわかりやすく優しく教えてくれました。その時のレッスンの場合は、複雑なテクニックを磨く世界ではなく、シンプルな旋律を繰り返し練習することで、鍵盤を叩けば特定の高低の音が出るという最も基本的なメカニズムから、どう叩けばどういう音が出るか、出せるかという音色の広がりといった、新しい領域に進んでゆくところでした。

ところで、著名なピアニストともなると、鍵盤に指をそっと置いただけで、鍵盤を叩いても押してもいない、

いないように見えるのに、静謐の音が聞こえてくるような、そんな繊細な特別な演奏をする人も現れます。「演奏から心がゆさぶられるほどの何かが伝わってくる」、演奏家を評してそんな言葉が聞かれることもあります。

長々とピアノの話をしてしまいましたが、実は指筆談とピアノとの関わりはよく似ていると、いつの頃からか思うようになったのです。指筆談は支援媒体であり、芸術ではないといわれるかもしれませんが、でも、ピアノも、それを弾くこと自体は芸術とはいえないと思います。

技術を極めて、それが自分の体の一部となって自在となった上に、美の探求や人生の精進を経て得た感受性や感応性のすべてを昇華させて、舞台上で名演を提供するだけでなく、演奏を媒体として聴衆と双方向で一体となれる、そのような域に、私は指筆談の領域で当事者の方々と共に到達してみたいです。

誰でも一定の技能を習得した後は、それぞれの技能と目的に見合った努力と活躍をすればいいという見解の基に、私はピアノも指筆談も、同じ道の広がりを感じます。

病気や事故による中途障害、先天性、または出生時・出生後の事故や病気による乳幼児期からの障害、あるいは神経難病の方など、広義で閉じ込め症候群の状態にある方がたくさんおられます。

指筆談の技能を極限まで高めて、そのような障害当事者の方々が、大切な誰かに思いを十分に伝えられるに足る有能な介助者になれるように。

同時に、指筆談を媒体として、当事者の方々に「高木と話をしたい」と思っただけのように。

私はこれからも休むことなく精進を続けます。

私にしかできない指筆談を目指したいです。

■ヨミトリ君最前線！

指筆談宣言！とばかりに、つい力んでしまいましたが、なんだか指筆談のことばかりで、「私のヨミトリ君の紹介はどうなっていますか」と開発者の岡田さんからクレームが来そうな状況です。

そういえば、前号の投稿でも、後から気が付いたら、ヨミトリ君についての記述は、「■理学療法士の先生は神でした」の項の、

「ヨミトリ君も、開発者の岡田さんがいつも当事者の方のヨミトリ君操作の計測データをしっかり取っておられることを見てはいましたが、今回自分の体験から「記録する」ことの大切さがよくわかりました。」の

わずか 2 行…(汗)。

というわけで、大いに反省し、今号ではヨミトリ君の今を、大々的にご紹介させていただきます。

といっても、実は東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」の会報に毎号掲載している、「ヨミトリ君

最前線！」から、許可を得て転載する方式です。

手抜きするな。自分の言葉で書け。

ご指摘はごもっともなのですが、決して言い訳ではなく、ヨミトリ君がデバイス、ソフト、アプリのすべての面で、3Dプリンター、AIの導入等により異次元の進化を遂げており、もう中途半端な受け売りの説明はできなくなってしまったのです。

だからこそ、岡田さんが自ら書いたヨミトリ君紹介文です。

「ひまわり」の当事者、ご家族を対象に、「体験してね」を念頭に、わかりやすく書かれていて、とても好評です。岡田さんは、今年度の対人援助学会年次大会にも恒例の一番乗りを目指して早くからポスター発表に応募済みですが、早くに出し過ぎて、その後にヨミトリ君が大幅に改良されたために、ポスターvs「ひまわり」会報で、情報の更新度に差が出てしまったという皮肉な結果に。また、会報は、読んでいただく説明文なので、岡田さんの「人間」味が感じられます。

ぜひ、以下をご覧ください。



支援と開発
がんばって
います！

ヨミトリ君最前線！

開発開始から5年、7代目の機材が完成しました。試作機も含めれば数十台を試作。（開発費は概ねレクサス 1 台分）
最新研究結果を含めて報告します。

■ヨミトリ君7号機登場



7 号機一式

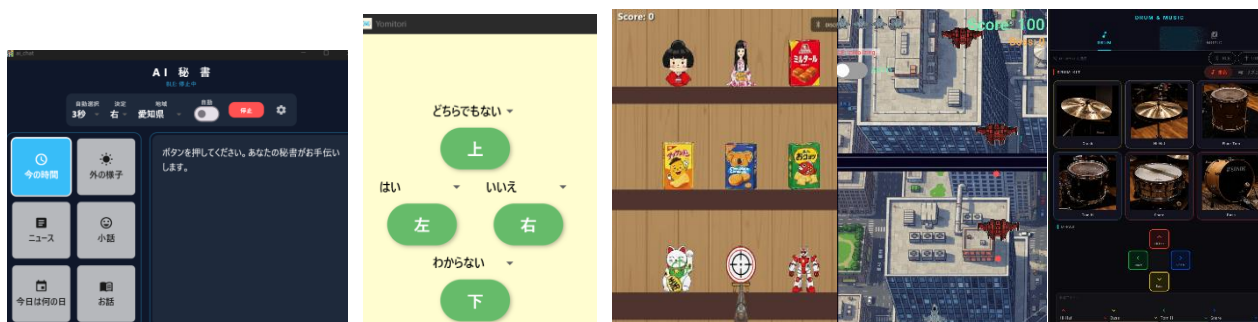
手を乗せるタイプ



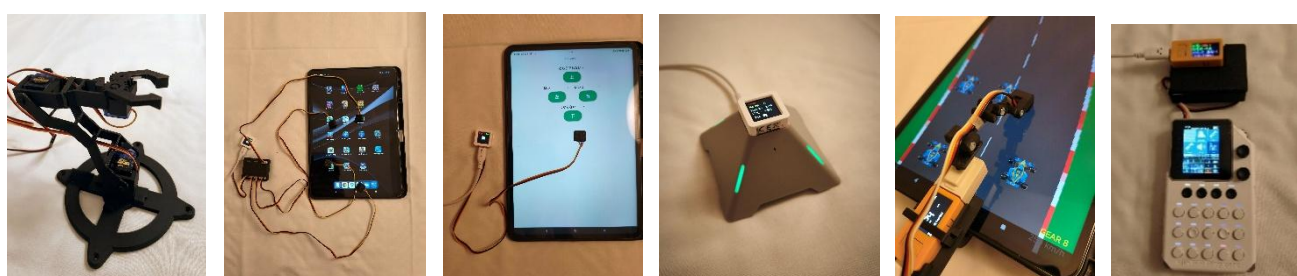
外骨格タイプ

3D プリンタを導入し
センサー形状は手の
形状に合わせて自由に
設計可能

開発に3D プリンタを導入。手を乗せるタイプの本体の厚みは約 2cm。外骨格タイプはどのような手の状態でもフィットします。デバイス全体もさらに小型軽量化が進んでいます。



意思疎通アプリ 3 種、ヨミトリ君専用ゲーム14種、AI で当事者を補佐する支援アプリ 2 種を開発。すべて Android、Windows、MAC に対応。アプリ開発に AI を導入し、支援アプリ開発が爆速化しています。AI で作曲するアプリで曲作り、シンセサイザーやドラム演奏で音楽も楽しめます。

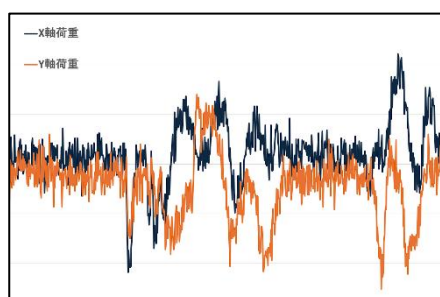


ヨミトリ君 7 号機用のロボットハンド、画面の任意場所のタッチ/ドラッグ、楽器制御などアプリ以外の操作にも複数対応。振動機能付きのドラムで音楽を体で体感することなどもできます。「やってみたい」という物があれば言ってください。作っちゃいます！

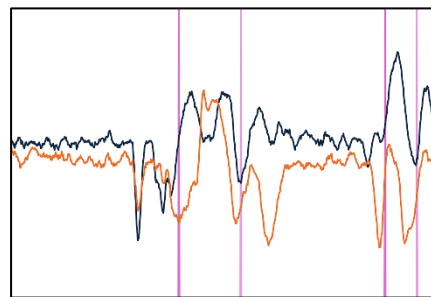
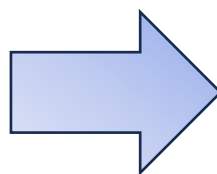
最新の意思疎通アプリと組み合わせることで、状態のいい方であれば「はい」「いいえ」の意思疎通も 60～70%程度はできるようになりました。
7 号機はすでに 15 名の方に提供し使っていただいています。

■不随意運動対策(7 号機に組み込み済み)

今までは不随意運動がある方はヨミトリ君の操作が難しかったのですが、
AI 開発に使用する演算式をヨミトリ君に導入(私は普段の仕事で AI そのものの開発もやっています



不随意運動を含んだセンサーの動き



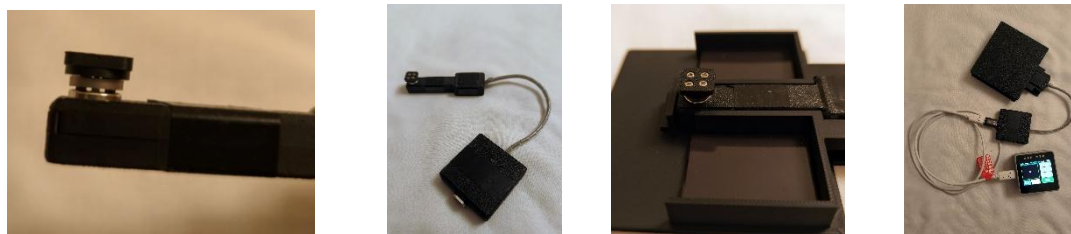
不随意運動の中から操作信号を識別(ピンクの縦線)

特殊な演算式で、不随意運動の中から操作信号を抽出することに成功、

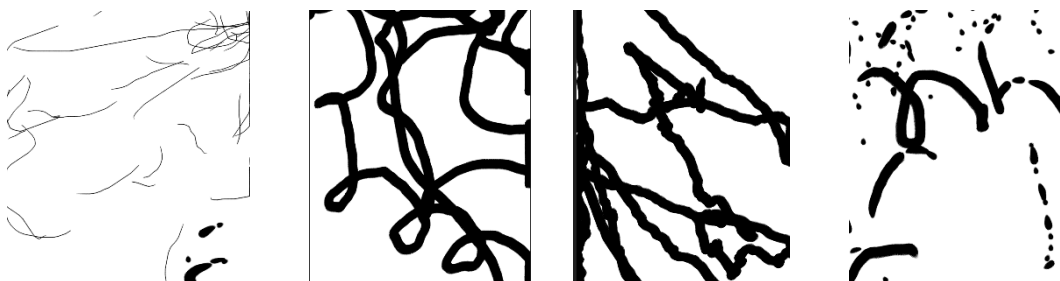
ある程度の不随意運動や呼吸等の入力の外乱がある状態であっても操作できるようにしました。

■書字認識システムの開発（研究中 試作段階）

当事者の微小な動きで書字できるシステムこそがヨミトリ君が目指している指筆談のデバイス化の最終形です。このデバイスはまだ研究段階ですが、デバイスで書字ができるようになってきています。



最新型の小型 6 軸荷重センサーを導入。高性能ヒューマノイドロボットなどに使われているセンサーをヨミトリ君に組み込むことで、32 方向の識別を可能とし書字認識を行います。



当事者の書字のサンプル

文字の書字まではできていませんが、手の書字動作の識別は全方向でできるようになりました。当事者が書いた文字が認識できるように研究を継続中です。

ヨミトリ君開発は止まることなく開発継続中です。最新機材を体験してみてください。以前に体験済みの方もぜひ最新機材に触れてみてください。以前よりも簡単に色々出来るようになっていきます。うまく操作できなければ操作できるよう研究し、改良を進めていきます。ヨミトリ君の開発に是非ご協力ください。支援のご依頼をお待ちしています。



■「あなたがわかっていること つたえたい」の広がり

遷延性意識障害や閉じ込め症候群の状態にある障害当事者の方々との 13 年間の意思疎通の取り組みの根幹には、いつも「あなたがわかっていること 伝えたい」という願いがありました。

当事者の皆さんとの一緒に活動としては、指筆談の介助により思いを語るお話会の開催、書字介助により紡いだ文章の発表、在宅介護を受ける当事者の方の担当者会議に参加する機会をいただき、医療・介護従事

者の方々に思いを伝える、等を行ってきましたが、この度、東海地区の拠点病院と東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」の連携プログラムが開始しました。

既に何人かの遷延性意識障害当事者の方が、画像診断や脳波、嚥下・呼吸器などの各種検査・診察を受け、症状の改善への取り組みを始めています。

当事者の方々が自らの言葉で、日々の生活の中での悩みやリハビリへの思いを伝え、専門の医師の先生方と話し合っ、方向性を見出しておられます。

第1陣の検査が10月中旬まで続きます。

次号で、その取り組みの詳細と成果をお伝えさせていただきます。

9月の半ばには、重症心身障害児の支援団体の施設をお借りして、初めてお子さん向けに指筆談とヨミトリ君の体験会を開催します。言葉を紡ぎ、ヨミトリ君を操作してゲームや意思疎通アプリを楽しんでいただけるよう、ヨミトリ君プロジェクトはがんばります！新登場のカメ太君の活躍もお楽しみに！！

No Promises. Just Possibilities.

確約はないです。でも可能性は常にあります！

あなたがわかっていること伝えたい。

情報を必要としている方、表出しているのにまだ伝わっていないあなたの大切な方に、指筆談とヨミトリ君が届きますように。

ご一緒にしましょ！

<https://www.goisshoshimasho.com/>

ヨミトリ君HP

<http://www.aizyoushien.com/index.php/yomitol-kun-project/>

東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」

<https://pvs-himawari.wepage.com/>

<筆者プロフィール>

インドネシア語・英語通訳・翻訳を経て、介助付きコミュニケーション「指筆談ヨミトリ」による意思疎通支援をライフワークとする。「ご一緒にしましょ」代表。ヨミトリ君プロジェクト。東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」役員。第52回NHK障害福祉賞優秀賞。ヨミトリ君共同考案者。